

研究専攻（専門領域）		日本・アジア研究専攻		学籍番号	06CS012
氏名	柴崎公美子	ローマ字	SHIBASAKI Kumiko	国籍 (留学生)	
修士学位論文名	安順地戯『地戯譜』と英雄物語の受容について －薛仁貴征東故事を中心に－				
提出年月日	2010年1月12日		指導教員	大塚秀高	
体裁 ()	(1頁文字数 1200字) 50頁		言語	日本語	
別冊添付資料等					
キーワード	中国俗文学 英雄伝奇小説 薛仁貴 地戯 地方民間芸能				
<p>本論は、地方民間芸能を取り上げ、古典小説、特に英雄伝奇小説との関わりについて論じようとするものである。</p> <p>取り上げた対象は貴州省安順市一帯で春節と中元節に演じられる“地戯”（地元の間人は“跳神”とも）と呼ばれる仮面劇で演じられる薛仁貴故事である。「説唱全伝地戯譜 薛仁貴征東」という唱本があり、七言の齊言句および十言句の韻文と散文からなる詩讚系の説唱形式で構成されている。「地戯譜」と呼ばれるこの唱本をテキストとして、清代までの文学作品と比較検討し、どのようにして現在の形になったかを考察した。</p> <p>結論としてこの地戯譜は、清の乾隆期の作である英雄伝奇小説『説唐後伝』と共通点が多くあり、元々あった脚本を、小説を使って改編したものだと考えられる。征東故事を含む小説は他にも明刊本が残る『唐書志伝通俗演義』や『隋唐兩朝史伝』があるが、『説唐後伝』は両者とは別系統の流れに連なる性質が窺われ、またその流通程度から見ても、明小説が参照されたとは考え難い。民間説唱文芸を取り込んで隆盛したと言われる乾隆期英雄伝奇小説は、やはり説唱系の芸能の中に受け入れられやすかったであろう。また、『説唐後伝』が歴史的事実から大きく離れた娯楽的な作品であったことも、祭祀から出発しつつ人々への娯楽へと発展した地戯にとって都合がよかったと思われる。</p> <p>何故小説を使って改編されたかということについて、地戯譜は近年においては読み物として販売されていた側面があり、読むことに耐え得るよう小説を用いて改編することを必然的に要求されたことが考えられる。他の演目の地戯譜で、唱本の底本とされるものと実演される地戯譜、販売される地戯譜の三種類が残るものを比較して見ると、販売される地戯譜には演じる上では必要のない詩や讚が挿入されており、これに対して底本には演出的な要素が多い。「薛仁貴征東」地戯譜にも詩や讚が多く含まれ、読まれることを意識して編集されたことがわかる。しかし小説が全て導入されているわけではなく、エピソードや描写の取捨選択が行われ、祭祀儀礼である地戯の特徴である儀礼的な部分が残されている。</p> <p>広東地方を中心に流行していた説唱詞話芸能の唱本「木魚書」の薛仁貴征東物語も『説唐後伝』並びに地戯譜とほぼ同じ内容であるが、戦闘場面よりも薛仁貴と妻柳金花との婚姻や家庭生活の描写が多く、これは地戯の受容層が屯田兵の末裔であるのに対し、木魚書の受容層が女性であったことによる。この事例は、受容層によって同じ題材の描き出し方が異なっていることを示している。</p>					